

## 洪 大容と清朝 — 洪大容の学者像と学問観 —

小川 晴久

### はじめに

三十五歳の冬から三十六歳の春の終りまでの半年間、冬至使の随行員として洪大容は宿願の北京旅行を果たした。その記録が『燕記』であり、『杭伝尺牘』<sup>(1)</sup>であり、ハンブル本『乙丙燕行録』<sup>(2)</sup>である。その後、『鑿山問答』<sup>(3)</sup>という作品が生まれた。たとえ夷狄の支配下にあつても学ぶべきものがあればまなぶ必要があると考えた北学派のリーダーであつたから、旅行の決断にはさほどの苦悩もなかつた。むしろ中国行を熱望していたのである。ただ当時の中国が清朝（異民族支配）であつたこととその土台は中国そのものであることとの矛盾がたえず念頭にあつたことも確かである。洪大容が中国行で果そうとしたものは、(1)書物でしか知ることのなかつた中国を実地に自分の目で見ること、(2)中国の天文台（天象台）を訪ね、西洋の天文学者と交流すること、(3)すぐれた人物と出会うことの大略三つであつたが、この中で彼が最も重きを置いたのが(3)であつた。往路二ヶ月、北京滞在二ヶ月、復路二ヶ月、計半年の旅ではあつたが、往路では沙河の郭生、北京では杭州出身の三君子、復路では三河の三人の学者との出会いがあつた。『鑿山問答』では、北京でみるべき人物と出会はず落膽して帰途につき、鑿巫閭山まで来て、隠棲しようとして山中をさまよううちに実翁と出会うという設定になっているので、実際に出会つ

た上記の七人は洪大容が脱帽する巨人（実翁）ではなかった。しかし『燕記』や『杭伝尺牘』を読むと、これらの人物との出会いは、真劍そのものであった。彼は真の学者（真士）とは何かの基準やそれを見抜く目をすでに持っていた。中国旅行の前に国内でそれを実践していたからである。国内でそのような学者に出会えなかったからこそ（北学派の学者を除く）、中国旅行に賭けたのであった。以下、出発前にもっていた彼の学者・学問観と学的実践、中国旅行での上記七人との出会い、帰国後の彼の学者観、総じてそれらに変化はないが、この順に洪大容の学者像と学問観（実学観）を見てみたい。私は今まで東アジア近世（一七〇一―一九世紀中頃）の実学規定を洪大容のそれ（実心実学）に見てきたが、この作業は同時にその実心がいかなるものか、近世（近代、現代ではない）の実学の本質がいかなるものをあきらかにする作業でもある。

### 一、出発前の学者・学問観と学的実践

洪大容の学問観がもつとも早く見てとれるのは二十三歳の作である「贈周道以序」である。師金元行の石室書院で学ぶ同学周道以の勉学ぶりを讃えた一文である。聖人となることを目標とし、日々学び、実践に励んでいる姿、とくに道を求めることの篤きと学を進める勇氣、求めてやまない姿勢と実行力を、洪大容はこのほか讃美した。以下の如くに。

「堯舜の徳は理のみ、而して吾と子はその理あり。堯舜の能は心のみ、而して吾と子はその心あり。之を為せば則ち堯舜、為さざれば桀紂、これ吾と子の共に勉むる所に非ざるか。堯舜の聖たる所以は、事事その理に当るのみ。桀紂の愚たる所以は、事事その理に当らざるのみ。求む能はざるを患ふるのみ。何ぞその至らざるを患へんや。古の学者わずかに一事を知れば、すなわち一事を行なう。一擲一掌血、一捧一條痕。今の学者口を開けばすなわち性善を説く。恒に言ふに必ず程朱を称ふ。而して高き者は訓誥に汨み、下き者は名利に陥る。ああ、たれか聖人の好むべきを知らざらん、而るに世にその人なし。たれか下流の悪むべきを知らざらん、而るに衆みなこれに歸す。他なし、行はざるの過ちなり。

人よくその知る所を行はば、何ぞ古人の及ぶべからざらんや。精一を読めば便ち精一を去る。敬義を読めば便ち敬義を去る。吾と子は行の一字のみ。」

石室書院で師の金元行が強調したのは実心もて実事を為すことであつた。師が亡くなつたとき、洪大容は次のように回想した。

「竊かに嘗に聞く、問学は実心に在り、施為は実事に在り、実心を以て実事を做す。過ちは寡かるべく、業は成るべし。」  
(祭漢湖金先生文、一七七二年四十二歳)

実心もて道（真理）を探究し、それがつかめたら実事の中で実行する。実心を以て実事を為すは、実心もて実学すると同義である。洪大容の実心実学は石室書院で学んだものだった。

三十五歳までの彼の学問を後半（四十四歳）回想した一文がある。

「容十数歳より古学に志すあり。章句の迂儒と為らざること誓ひ、軍国經濟の業を兼慕す。挙を累ぬるも中らず。」  
十六、十七歳の頃から数年間玄琴（コムンゴ）の魅力にとりつかれ、樓台や景勝の地で演奏することを楽しんだということ、また二十代に入って反省をし、石室書院で一時經学に没頭したこと（上記周道以との出会いはこの時期であつた）、二十代後半から天文学の勉強に従事し、三十一歳のとき羅石塘に渾天義の製作を頼み、三年後に完成ののちは自宅前に私設天文觀測所（籠水閣）を作り、実測に當つたことをつけ加える必要がある。科挙試に何度か挑戦するも失敗したことも落せない。

三十五歳までの彼の学問は金元行の強調した「実心を以て実事を做す」の實踐といつてよい。実事は音楽（律学）であり、天文学であつた。軍国經濟の業もそれに當る。音楽や天文学などは朝鮮では中人階級が職業としてそれに従事したが、洪大容の学問はふつうの両班の学を越えていた。演奏をし、觀測をするという意味できわめて実践的であつた。この力量（技量）は中国旅行で十分に發揮された。

中国行の前の洪大容について今一つ、彼が国内にあつてもいかに真に友としうる人物を熱心にさがしたかを見ておこう。これも晩年の四十九歳の時の回想である。

「大容は下国に生長し、見聞偏陋、性また骯髒、苟合する能はず。半生交遊、号して密友となす者は数人に過ぎざるのみ。嘗に以為く人生の樂は、出れば即ち君臣契遇し、処れば則ち友朋と賞音す。契遇の樂は、これを得るに命あり。賞音の樂は、これを求むるに道あり。是を以て、縫掖俎豆の場に周旋し、文酒彝鼎の会に跌宕し、山に入りて隠淪を尋ね、海に浮びて迂怪を訪ぬ。屠沽の賤、僧道の流、胥隸優伶傭丐の徒と雖も、いまだかつて属目して陰求せずんばあらず。盖し、その地勢巖險、習俗褊隘、疑ひ多く信少なし。軽く合して疎んじ易し。」(答朱朗齋文藻書、一七七九年四十九歳)

兩班の集まる場、學者の集まる所、山の中、海の上、白丁や酒売り、僧侶や道士、衙前、奴隸、廣大、人夫、乞食の類まで目を凝らして、大人物はいないかさがしたという。しかし朝鮮は地勢もけわしく、習俗も狹隘で、疑い深く、離合も早く、そのような人物はいなかったという。勢い彼の目は広大な中国に向わざるをえなかった。

## 二、七人の人物との出会い

では中国で彼はいかなる人物と出会ったか。

△沙河郭生Vまず往路では沙河所の食堂の主人郭生との注目すべき出会いがあつた。郭生は十八年前まで科擧のための勉強をしていたが、今は仕官の時代ではないと断念し、商旅の休憩所兼食堂経営に身をやつしていた。内房にあつた彼の机を見て、読書人であることをいちやく洪大容は見抜いたが、同行の通訳は信じようとしなかつた。李訳官と郭生との問答は簡潔ではあるが、驚くべき記録である(原漢文)。

食堂を経営していて、読書する暇があるとは考えられない、それに科擧を受けないのに読書が何の役にたつのかという訳

官の問いに郭生は、「店主ではあるが、従業員（店僕）がいて、薪作りや水汲みの仕事をやってくれる。暇は作れる。また読書には独自の楽しみがある。科挙の用だけではない」と答えた。農工商はそれぞれで生計をたてている、士にとって読書は官を得る手段だ、仕官しないでどう生計がたつのかという訳官の問いに郭生は「肉体労働をすればよい」（勤其四体）と答えた。これ以後のやりとりを原文に則して口語訳で示そう。

「李訳官はいう。人と生まれて一番得たいのは高位高禄である。位尊く、俸厚く、身安らかに名も立ち、殺活の権を佩し、榮辱の柄を掌握している。隣里親戚は畏懼して走り附し、望みを承けたまわり、嘖笑してただ人より後れるのを恐れる。これ人生の能事にあらざるか。ところがどうだ、あなたは身をこのような店で汚し、卑しい仕事に甘んじ、羊を烹、飯を作つて旅人に提供する、秤はかりに懸かざりけ籌さしを握り、わずかな利益を競う、これは丈夫（男子）の賤しい仕事であり、布衣の辱処である。しかるに恥を知らず、強いて大言壮語する、貧賤も憂うるに足らず、富貴も求むるに足らずと。まちがつていないか。郭生は笑つて答えた。女子は立派な婦人となることを願ひ、男子は官に就くことを願う。立派な婦人とならなければ家を樹てることができず、官に就かないと民衆を濟すくうことができないからだ。家を樹てようと思えば、情慾を遠ざけ、強暴さに屈して身を汚さないことが必要であり、民衆を濟すくおうと思えば、徳義を尊び、危乱に陥らないことが必要である。しかるにあなたは（高い地位につくことのみ求めて）権力をふるつて女子の情慾をひき出して禁ぜず、男子たるの徳義をあざ笑つている。時に利不利がある。命に幸不幸がある。不利も不幸もないのが道である。今君は尊位に居り、厚俸を享けるのは、利であり幸である。しかし不利の利、不幸の幸を知らないようでは、共に道を語ることはできない。かつ位が尊ければ責任は重く、責任が重ければ身は危い。俸給が厚ければ仕事も多く、仕事が多ければ怨みも集まる。怨みを集め身をも危くする。快樂の時は少く、憂畏の時の多いのを私は恐れる。今私が卑しい仕事を行ない、賤辱を恥じないのは、時が不利であり、命も不幸である。しかし不利も不幸もない道（真理そのもの）は、不変で増減するところがない。私がそれをどうして楽しまずにいられようか。鶏鳴と共に起き、室堂を灑掃さいし、門をあけ客を

招く。商旅はこぞつて来てくれる。清潔な酒食をととのえ、旅の苦しみを慰め、またまぐさを沢山用意し、安心して旅を続けてもらう。使った経費をはかり代金を納めてもらう。先方も私も納得ずくである。得られた利益でこの家を維持し、この身を養う。憂いや身の危険もなく、人から怨まれたり、罵られたりすることもない。この静けさとのびやかさ、最高の楽しみがここにはある。私がいつ大言壮語したことがあるか。宮仕えには栄光のときもあれば、辱めを受けるときもある。才高き者は野にあり、金多き者が位にある。こんな世では官吏であることの方が恥しいと。」

傍らで聞いていた洪大容は余りの見事な見識に言葉を失ったという。求めていた人物の一人だと思った途端、一行の出発の角笛えが鳴り、店主の郭生も慌だしく外に飛び出して行ってしまい、跡を追わせたが、二度と会えなかった。洪大容はがっかりして、しばし我を忘れるほどだった。

△杭州の三君子▽清（中国）で出会った七人のうち、もつとも時間をかけ交流したのは北京で出会った杭州出身の三人の学者（科挙受験者）であった。すべて筆談であったが、そのメモは彪大な量になった。洪大容よりも十二歳年長の陸飛（四十八歳）、一歳下の嚴誠（三十五歳）、十一歳下の潘庭筠（二十五歳）、みな陽明学の影響を受けていた。陸飛は「豪曠決烈如秋江」、嚴誠は「奇健遒勁如寒松」、潘庭筠は「風流愷悌如春風」と性格も異なり、才学も差があつたが、「内外一致、心口相応、世儒の紛飾に齷齪する態がない」点では全く一致していたという。はじめ出会つたのは嚴誠と潘庭筠。前後七回も、しかも各々夕刻までまる一日中交流している。陸飛は遅れて北京に到着し、辛うじて二回（二日）の交流である。朝鮮側は洪大容より十三年長の「豪邁の人」金平仲と二人。金平仲は無類の酒好きで文学好き（よく漢詩を解す）、洪大容は下戸で酒が飲めず、經学に強く謹嚴実直。実に名コンビであつた。四人での筆談が七日間、五人での筆談が二日間ということになる。筆談の威力は凄いもので『杭伝尺牘』は書簡のみならず、筆談の記録も収められていて、読者はあたかも七日間の交流に同席している観がある。彼らが出会つたのは北京に着いて一ヶ月たった二月三日。北京滞在二ヶ月間の後半である。四人の会談は二月三日（一回目）、二月四日（二回目）、二月八日（三回目）、二月十二日（四回目）、二月十六日金平仲のみ参

加した筆談)、二月十七日(五回目)、二月二十三日(六回目、このときから陸飛が参加し、五人の筆談となる)、二月二十六日(七回目、最後の筆談)。語り合ったことは実に多い。両国の詩集、学問(陸王学と朱子学)から始まり、歴史(洪大容は自国の概略を宿舎で一文「東国紀略」にしたため、彼らに送っている)、家礼、児童の教育、詩経の小序と朱子注の是非、科挙論、天主教や西洋天文学そして洪大容の私設天文観測所「籠水閣」に至るまで。陸飛が加わってからは陸飛の王陽明観がまた詳細に論じられ、記録されている。我々の関心は学者・学問論であったので、彪大な筆談の中から次の三ヶ所を取り上げる。

まず二月十二日・四回目の筆談で下された洪大容の威厳と潘庭筠評。

「余曰く、弟の二兄に於るや、その才を愛するにあらず、その学を取るにあらざる。その心を慕ふなり。只だ恨むは言語通せず、逢別太忙、いまだ尽く深奥を叩くあたはず。弟またほば平日小小自得するあるも効するをえず、愚これ至恨たりと。」<sup>⑩</sup>

洪大容が二人を評価したのは、才能であるよりは学問、学問であるよりはその心であるというのだ。彼は二人の心をもつとも評価したのである。慕しいものとして。彼ら二人は親や親戚の願いから科挙を受けざるをえないが、名利には関心はないと初対面のときに断言していた。二人とも嚴子陵や潘岳の子孫という名家の出という事情もあった。真の価値あるものや道を探究せずには止まないと純心さが洪大容の心をとらえたのであろう。嚴誠は二十九歳のとき大病にかゝり、死線を越えていた。仏教にも陸王学にも造詣が深かった。理学を語るにも同志がいらないことを嘆いていた。若い潘庭筠は女性のような美しさを持ち、洪大容の玄琴の演奏にも涙するほど感受性が強かった。

洪大容が彼らに引きつけられただけではない。彼らの方も洪大容に強く魅せられた。陽明学を批判した洪大容に初めは儼然としていた嚴誠も「平淡務実」な洪大容の議論を評価し、二人の間柄は「情好日密」となっていた。嚴誠の洪大容評価は「純粹以て精たるは洪兄これなり」「湛軒は時中の聖というべし」(二月二十三日、六回目)、「それ粹然無疵」(二月二十

六日、七回目」というところまでいく。「時中之聖」という評価を洪大容は言下に否定するが、「純粹以精<sup>①</sup>」という規定は厳誠のそれだけに大変貴重である。洪大容が才よりも学よりも大事にした心とは「純粹以精」を要件としていたとみることができる。

嚴誠らを前に洪大容が「平日小小、自得するあり」と言ったその自得は、別れに際して二人に贈った言葉にそれを見ることがができる。潘庭筠に贈った言葉の前に次の前書きがある。

「仁者の別れには必ず贈るに言を以てするあり。余なんぞ敢えて（それに）当らんや。然りと雖も吾輩まさに生死をもて別れんとす。それ言ふべきなからんや。」<sup>②</sup>

自分は仁者ではないが、あなたたちとはもう二度と会えないであろう、だから私の自得した言葉を贈ろうと。潘庭筠に贈った言葉は次の五条。

「太上は己を修めて人を安んず。その次は道を善くし教えを立つ。最も下なる者は書を著はし不朽を図る。この外なる者は利達を求むるのみ。苟<sup>いや</sup>しくも利達を求むるのみならば、またまさにいずれの所か至らざらんや（どんな悪いことでもする意——小川）。」

「仕に時に榮となるあり、また時に恥となる時あり。人の本朝に立ちて志は三代の礼樂に在らざれば、これ容悦のためなり、これ富かつ貴のためなり。これにして恥じるを知らざれば、それともに言<sup>かた</sup>り難し。」

「高才ありて文章を能くするも徳もつてこれを將<sup>もち</sup>るなければ、或いは羸<sup>つか</sup>れて薄倖の名を得、或いは陥りて輕薄の子となる。かくのごとくなれば、才は恃<sup>たの</sup>むべからずして、徳は緩<sup>ゆる</sup>くすべからず。」

「寡欲にあらざれば以て心を養ふなし。威重にあらざれば以て学を善くするなし。任重くして道遠し。凡そ我が同志いかなぞ敬せざらんや。」

「善惡中に萌<sup>まき</sup>して吉凶外に著<sup>あき</sup>らかなり。もし徳を進め、業を修めんと欲すれば、けだしまたこれを己れに求むるのみ。」



嚴誠への贈言は次の四条。

「これ杭に山あり、採るべし茹ふべし。これ杭に水あり、濯ぐべし漁るべし。文武の道は、布して方冊に在り。巻きて舒ぶべし。子弟これに従ふ、その成を觀るべし。優なるかな、遊なるかな。以て吾が生を終はるべし。」

「それ道一なれば専らなり。専らなれば則ち静。静なれば則ち明生ず。明生じて物乃ち照さる。」

「止水明鑑は体の立なり。開物成務は用の達なり。体に専らなる者は仏氏の逃空なり。用に専らなる者は俗儒の利に趨るなり。」

「朱子は孔子に後るるなり。夫子微かりせば、吾誰れにとも帰せんや。然ると雖も依様苟同は佞なり。意を強ひて異を立つるは賊ふなり。」

陸飛は潘庭筠への五条を見て、「これは（張載の）『正蒙』（の思想）だ。その文が似ているだけではない。（氣象もだ）」と即座に断定した。洪大容の『鑿山問答』には張載の『正蒙』の影響がある。才能よりも性（徳）を重んずるのは『正蒙』誠明篇の根本思想である。洪大容が自得したところをみて、『正蒙』の精神だと看破した陸飛の眼識もまた高い。洪大容も陸飛への評価を内心で高めたことであろう。

嚴誠への四条で、注目すべきは「止水明鑑、体之立也、開物成務、用之達也」という規定である。実心と実事（実学）の表裏一体の石室書院の学問的精神である。

△三河の三学者▽往路で出会ったのは、孫蓉洲、鄧汶軒、趙梅軒の三人の学者である。彼らとの交流は帰国後の手紙の交換が主であり、同じ『杭伝尺牘』の中に孫蓉洲への手紙六通、鄧汶軒への手紙四通、趙梅軒への手紙二通が収録されている。この中で趙梅軒に宛た手紙の中で示された洪大容の讀書論（金泰俊氏は「讀書符訣」と名づけているが、それは洪大容が孟子の「以意逆志」（意を以て志にむかう）を自分の讀書法の秘訣として付した名である）が極めて大事である。既に見た沙河郭生の見解と、次に見る「贈洪伯能説」とこの讀書論はともに朴趾源の「原土」の原型となったと思われるからである。

同じ梅軒に与えた手紙の中の次の規定も注目にも値する。

「実徳は己れに在り。名成は人に在り。己れに在るは性なり。人に在るは命なり。君子の遯世独行は性とすする所のみ。それ命は如何。名を好むに始まり、名を成すに中し、終るに名を忘る。広博深遠、民得て称するなし。あに益々道に進むにあらざるや。」<sup>16)</sup>

名声は人がつけるもの。確かなものは己れのうちにある実徳。本当に自分のうちに実徳があるか否かが肝心なことである。

おわりに

上記の△三河の三学者▽の所で帰国後中国の学者たちと交した手紙の内容の一部を紹介してしまつたが、本稿を閉じるに当つて、帰国直後の陸飛への手紙、四十九歳になつて朱文藻に出した手紙から、彼の学者観を一条ずつ抜き出しておこう。

「惟だ態色を去り、天真に因り、門洞を重んじ、端倪を開き、軒豁なること水鏡のこれを監て照さざるなきがごとく、鍾鼓のこれを扣ちて響かざるなきが如き者、乃ち吾の謂ふ所の士なり。それ然る後、才や、学や、術や、始めて得て言ふべし。是を以て容の平生自ら勉むる所の者は是れに在り。その友を求むる所以の者もまた是れに在り。」<sup>17)</sup>

(与陸篠欽飛書、一七六六年 三十六歳)

「惟だそれ実心実事日(々)に実施を踏む、先ずこの真実の本領ありて、然る後に凡そ主敬、致知、修己、治人の術、方に措置する所ありて虚影に帰せず。」(答朱朗齋文藻書、一七七九年 四十九歳)

三十六歳と四十九歳のときの論は全く同じである。実心実学、実心実事の学の実心とはいかなるものかをよく我々に語つてくれている。何の先入見もなくありのままの真実を受け入れる態度、真実を見つめる目、真実にのみ忠実でありたいという熱い心(僅かでも真実からそれていたなら、おおよその正しさによる名声をもすべて捨て、絶望と失意のうちに自分を置く

というシモーヌ・ヴェーユのあの態度か<sup>(19)</sup>がそれである。このような心をもった学者であればこそ、その心によって道（真理）が把握されれば、その恩沢は四海に及び、その真理は千載<sup>(20)</sup>をも照らす力を持つという。年代未詳の次の規定は朴趾源作「原士」の冒頭を思わせる。

「沈潜は仁義の府、従容は礼法の場。天下の富も以てその志を淫するに足らず。陋巷<sup>(21)</sup>の憂も以てその樂しみを改むる能はず。天子も敢へて臣とせず、諸侯も友とするを得ず。達して之を行へば則ち沢は四海に加はり、退きてこれを蔵せば則ち道は千載に明らかなり。然る後に乃ち吾の所謂士なり。これこれを真士と謂ふべし。」（贈洪伯能説、年代未詳）

このような学者として洪大容が孔子を尊敬していたことは、嚴誠に贈った言葉で明らかである。また帰国後の作品『鑿山問答』の主人公実翁もここに言う真士であろう。本稿は洪大容が中国旅行で探し求めた学者がいかなる内実を備えた真士であったのか、彼が求め実践した実心実学とはいかなるものであったかを主題にしたが、それは三十五歳の中国旅行に発つ以前にすでに形成されていたことを明らかにした。このことの確認は重要である。半年間の中国（清）旅行の中で彼が求めた真士の要件は始めからはつきりしていた。だからこそ沙河の郭生やら杭州の三君子を発見できたのである。彼の夢は鑿巫閭山中の隱者実翁として実現した。実翁の中には孔子も、張載も、郭生も、杭州の三君子も、国内の数人の密友も、すべて投影されていたが、その中心に洪大容自身が存在したことは言うまでもない<sup>(22)</sup>。洪大容は朝鮮の狭さを嫌った。その意味で中国に出て学問的巨人（真士）を探することは彼の宿願であった。しかし洪大容は自分の実心実学の営み（実践）をすごく大事にした。自分を大切にしたい。小国でも広い世界を求める心と実心さえあれば、真士となれることを身をもって示してくれたことが、後世の我々への最大の贈り物であろう。（了）

注

- (1) 燕記も杭伝尺牘も洪大容の全集、『湛軒書』（上下、景仁文化社影印）所収  
(2) 『註解乙丙燕行録』（ソウル、太学社、1997年）

- (3) 拙著『朝鮮実学と日本』花伝社、1994年)所収の「実学概念について」(1981年)「気の哲学と実学」(1990年)参照
- (4) 「堯舜之徳理而已而吾与子有其理矣。堯舜之能心而已而吾与子有其心矣。為之則堯舜、不為則桀紂、此非吾与子之所共勉者乎。堯舜之所以聖、事事当其理而已。桀紂之所以愚、事事不当其理而已。愚不能求爾。何患其不至也。古之學者機知一事、便行一事。一擱一掌血、一棒一条痕。今之學者開口、便說性善。恒言必称程朱而高者汨於訓詁、下者陷於名利。嗚呼孰不知聖人之可好而世無其人。孰不知下流之可惡而衆皆歸之。無他、不行之過也。人能行其所知、何古人之不可及哉。說精一、便去精一。說敬義、便去敬義。吾与子、行之二字。(原注)時君說心經、故云。」『湛軒書』(内集、序)456、457頁
- (5) 「竊嘗聞、問学在衷心、施為在实事、以衷心做实事、過可寡而業可成。」『湛軒書』上、297頁
- (6) 「容自十數歲有志於古学。誓不為章句迂儒而兼慕軍国經濟之業。累舉不中。」(与汝軒書、『湛軒書』上、465頁)
- (7) 「大容生長下国、見聞偏陋、性又骯髒、不能苟合。半生交遊、号為密友者不過數人而已。嘗以為人生之樂、出則君臣契遇、処則友朋賞音。契遇之樂、得之有命、賞音之樂、求之有道。是以周旋於縫掖俎豆之場、跌宕于文酒彝鼎之會、入山而尋隱倫、浮海而訪迂怪。雖屠沽之賤、僧道之流、胥隸優伶傭丐之徒、未嘗不厲目而陰求焉。蓋其地勢險峻、習俗褊隘、多疑少信、輕合易疎。」『湛軒書』上、449頁
- (8) 「沙河郭生」行次沙河所店房。余与諸紳將少休于内坑。店主所処也。見坑下倚卓、潔淨有看書作字之痕。余謂諸紳曰店主必讀書人也。諸紳笑曰此中豈有讀書人。有頃店主入來。年可四十余。短少有風儀。問其姓。為郭。余問君具此書卓、豈讀書於此乎。郭生曰然。余曰亦為文章志舉乎。郭生曰曾為舉子業。廢之已十八年。時訊官姓李者在傍笑曰身為店主、奚暇讀書乎。且既不志舉。讀書將何用。郭生笑曰雖為店主亦有店僕以代薪水之勞。豈無暇讀書乎。且讀書各有意趣。豈徒志舉而已乎。李訊笑曰農之耕田、工之制器、商之通貨、士之讀書、皆所以求食也。讀書而不求官、食從何出。郭生笑曰貧富有命、貴賤有時。求之而不可必得、去之而不可必免。富貴雖可樂、憂亦隨之。貧賤雖可憂、樂在其中。遊心經史、聊以自娛。勤其四体、何患無食。李訊曰人生得意、孰如官祿。位尊、俸厚、身安、名立。佩殺活之權、掌榮辱之柄、隣里親戚、畏懼趨附承望、擊笑惟恐或後。此非人生之能事乎。看君溷身店肆、甘心卑瑣、烹羊作飯、以供行旅、懸秤握籌、以競刀錐。此丈夫之賤行、布衣之辱処。然且不知恥、強為大言、以為貧賤不足憂、富貴不足求、可乎。郭生笑曰女子生而願為之婦、丈夫生而願為之官。不為婦則無以樹家、不為官則無以濟衆。思樹家、故遠情慾而不汚於強暴。思濟衆、故尊徳義而不入於危亂。君乃不禁女子之情慾、欲笑丈夫之徳義乎。時有利不利、命有幸不幸。無不利無不幸者道也。今君尊位、享厚俸、固利且幸也。未知不利之利、不幸之幸則不可与語道也。且位尊責重、責重則身危。俸厚則用繁。用繁則怨集。集怨而危身、吾恐其快樂時少而憂畏時多也。今我躬行卑瑣不恥賤辱、乃時不利也、命不幸也。其無不利無不幸者固無所增減焉。吾何為不樂哉。鷄鳴而起、灑掃室堂、開門招客、商旅如歸。既潔酒食以慰其苦、亦豐菽秣以利其往。計費收金、物我無憾。取其贏余以資家食身。絶憂危、人無怨言。迢然閑放、至樂在中。吾何嘗強為大言乎。因歎曰仕有榮時、亦有辱時。才高者在野、金多者在位。今世為官、我亦恥之。余聞之失声称奇。將延坐与語、使行已吹角嚴裝。諸訊及紳將皆趨出。郭生亦不辭而走。使人求之不得。蓋賢而隱於市門者。登車就途。悵然如有失焉。」(『湛軒書』下、燕記、311、312頁)
- (9) 「乾淨録後語」参照。(『湛軒書』上、647、651頁)
- (10) 「余曰弟於二兄、非愛其才也、取其学也。非取其学也、慕其心也。只恨言語不通、逢別太忙、未能尽叩深奥。弟亦略有平日小小自得而不得効。愚此為至恨。」『湛軒書』上、533、534頁
- (11) 時中之聖は『湛軒書』上594頁、純粹以精は同598頁にあり。
- (12) 「仁者之別也必贈以言。余何敢當。雖然吾輩將生死別矣。其無可言乎。」(『湛軒書』上、583頁)
- (13) 「太上修己而安人、其次善道而立教、最下者著書而圖不朽。外此者求利達而已。苟求利達而已、亦將何所不至哉。仕有時乎為榮、亦有時乎為恥。立乎人之本朝而志不在乎三之礼樂、是為容悅也、是為富且貴也。此而不知恥、其難与言矣。有高才能文章而無徳以將之。或贏得薄倖名、或陷為輕薄子。若是乎才不可恃而徳不可緩也。非寡欲無以養心、非威重無善学。任重而道遠。凡我同志奈何不敬。善惡萌於中而吉凶著於外。如欲進徳而修業、蓋亦反求諸己而已矣。起潛看畢曰写一張与我作座右銘常目。又曰竟是正蒙不特其文之似而已。又讀贈力蘭語曰維杭有山、可採可茹、維杭有水、可濯可漁、文武之道、布在方冊、可卷而舒、子弟從之、可觀厥成、優哉遊哉、可以終吾生。」

夫道一則專、專則靜、靜則明生焉。明生焉而物乃照矣。

止水明鑑、体之立也。開物成務、用之達也。專於体者、弘氏之逃空也。專於用者、俗儒之趨利也。

朱子後孔子也。微夫子、吾誰与歸。雖然依樣苟同者、佞也。強意立異者、賊也。」(『湛軒書』上、583頁)

(14) 金泰俊著『虚学から実学へ——十八世紀朝鮮知識人洪大容の北京旅行』(東京大学出版会、124頁)

(15) 『湛軒書』上、436頁

(16) 「実徳在己、名成在人。在己性也、在人命也。君子之遯世、独行性而已。其如命何。始於好名、中於成名、終焉忘名。広博深遠、民無得称。豈非益進於道乎。」

(『湛軒書』上、435頁)

(17) 「惟去態色、因天真、重門洞、開端倪。軒豁如水鏡之監之無不照、如鐘鼓之扣之無不響者、乃吾所謂士也。夫然後才也、術也、始可得而言矣。是以容平

生所自勉者在是焉。其所以求友者亦在是焉。」(『湛軒書』上、369頁)

(18) 「惟其実、心実事日踏実地。先有此真実本領、然後凡主敬致知修己治人之術、方有所措置而不歸於虚影。」(『湛軒書』上、451頁)

(19) 「考えることを職業にしている、すべての人たち、司祭、牧師、哲学者、作家、学者、あらゆる種類の教授たちにたいして、その場ですぐ、つぎの二つの

運命のいづれか——すなわち、たちまち決定的なかたちで、文字通りの意味における白痴状態のなかに転落し、そのような崩壊に伴ういつさいの屈辱を蒙り、ただ単に、そのあらゆる苦渋を味わうだけの明敏さのみを与えられるか、あるいはまた、瞬時にして世界的な名声と死後数千年におよぶ栄光とを保証してくれるような、めざましい突然の知的能力の発達が与えられ、ただ単に、その思考がいつでもやや真理のそとにあるという不都合だけを甘受するか——を選択するように迫ったとしたら、彼らの多くがかかると躊躇を感ずると信じられるだろうか？」(『シモーヌ・ヴェー

エ著書集』第5巻「根を持つこと」281頁)

(20) 『燕巖集』(景仁文化社影印)、138頁1

(21) 「沈潜仁義之府。従容礼法之場。天下之富不足以淫其志。陋巷之憂不能以改其業。天子不敢臣、諸侯不得友。達而行之則沢加於四海。退而蔵焉則道明乎千載。然後乃吾所謂士也。斯可謂之真士矣。」(『湛軒書』上、270頁)

(22) 拙文「慕華と自尊の間——十八世紀朝鮮知識人の中国観」(『比較文化研究』19、東京大学、1980年)